慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに(ソフィ・ カル : 歩行と芸術)
Sub Title	Avant-cale
Author	鷲見, 洋一(SUMI, Yoichi)
Publisher	
Publication year	2002
Jtitle	Booklet Vol.9, (2002.) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000009-04394245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに　Avant-cale

アヴァン＝カル（カルの前）とは、もともと「船の先端部」を意味するフランス語である。ここではカルという困った迷い船の就航に先立つ「前口上」というほどの意味だ。

困ったことの第一。ソフィ・カルというフランス女性（あえて「アーティスト」とは言わないでおこう）の営みに、果たしてこのブックレットのような学術出版物の器が相応しいものかどうか。ソフィにおなじみの一連の活動や振る舞いには、批評家や研究者がまともにそれを取り上げて論じることを、明らかに初めから拒絶しているようなところがある。いや、「拒絶」という言い方は正しくない。「拒絶」はソフィ側の決然とした戦略や思想を前提とするからだ。彼女の場合、ことはより曖昧でノンシャランな相貌を帯びていて、あまり一般化したり、そもそも構えて論じること自体がおかしいような趣さえある。

「ソフィ・カル特集号」を謳ったこのブックレットの編集過程そのものが、ソフィ式といえばいえないこともない。そもそも1999年11月15日に開催された、慶應義塾大学三田キャンパスにおけるイヴェントにしてからが、担当所員は私ではなく、現代美術専門の近藤幸夫さんの筈だった。それが近藤さんの都合で、現代アートにはまったく暗い私が肩代わりすることになった。写真の腕といい文章の味わいといい、決して本当のプロとはいえない「アーティスト兼作家のソフィ・カル」を門外漢の私が担当する。これはいかにもソフィ好みの構図である。

さて、そのイヴェントであるが、いかめしい「講演」やあるいは気楽な「トーク」などでは少しもなく、近藤さんが解説で述べているように、1つの「パフォーマンス」であった。ソフィの語り、仕草、それに対する聴衆の反応、質疑などのすべてが、既存のデータを踏まえた「事実の確認」や「真実の証明」などではなく、それ自体虚構の作品であり、地面ぎりぎりの低空飛行で実現された航空ショーのアクロバット演技なのであった。

そのイヴェントの記録を兼ねたブックレットを、私たちはどこまでも真面目に作った。真面目にとは、つまり、ゲラを重ね、直しを入れ、配列を考え、といった普通どこの大学や研究所でもやっている編集作業のことである。だが、こちらが本気で仕事にいそしむほど、次々と予期しない「困った」問題が持ち上がる。たとえばフランスにいるソフィ自身の対応だ。近藤さんがソフィの講演部分だけはどうしても日仏バイリンガルで印刷したいと言い出し、結果はそうなった。ところが、ソフィ本人は、会場での喋りっぱなしのフランス語を起こしたテクストに、大して手を入れてくれていない。正直のところ、翻訳の日本文の方がはるかに位相の高い、立派

な文章になっているのである。いっそのこと、場当たりの談話に伴うケアレスミスや喋り間違いだらけの原稿を無修正で活字にし、また、フロアからの日本語質問を同時通訳が慌ただしく翻訳したままのフランス語を、これまた一切手を入れずに印刷したら、それこそソフィ自身の「皺だらけの生暖かいシーツ」や「尾行しながら撮影したピンぼけ写真」にも釣り合う、記念碑的特集号になったかもしれない。最終の段階で、その選択はなされず、フランス語原稿は日本語の堪能なフランス人の閲読に委ねられた。ただし、「お化粧直し程度に、日本語訳の範囲をはみ出さないで」という条件付きで。

特筆すべきは巻末の書誌である。中島恵さんの労作だ。これだけ整ったソフィ・カル書誌はめったにないだろう。ただ、ソフィの顔写真がどこそこの週刊誌の表紙を飾ったというデータと、フランスやアメリカの高邁な美術専門誌に掲載されたアカデミックなソフィ論とが仲良く呉越同舟という書誌は、それ自体が「冗談」であり一種の「パフォーマンス」であろう。

ソフィ・カルの営みで、私が強く惹きつけられるものは、その記録と収集の執念である。しかも、その記録や収集の対象が、必ずしもソフィ自身の意志や企図によってあらかじめ選ばれているとは限らないところが重要だ。誰でもいい、ある男の後をつける、列車でたまたま相部屋になった相手の写真を数百枚も撮る、好きなアメリカ人と結婚したいがために彼と共同の映画制作企画をでっちあげる。こうしたほとんど気まぐれ、即興に類する仕草や営みを介して、私たちが日頃「アート」や「作品」について抱いている固定観念は、徹底して愚弄され、相対化される。

反面、そうした「反アート」の姿勢を、現代芸術論の範疇でいかめしく捉えようとしたり、何か新しい思潮の旗印にしようとする文学や美術のジャーナリズムに対して、ソフィはこれまたきわめて意地の悪い反応を示す。どちらの側にとっても、扱いやすい相手ではない。

ソフィは「こちら」にも「あちら」にもいない。むろん、このブックレットの中にもいるようでいない。逆に考えれば、ブックレット自体が、ソフィという迷い船を曳航(えいこう)しようとして、いつの間にか自分も迷ってしまった間抜けなボートなのかもしれない。判断は読者諸氏に委ねられるだろう。その読者諸氏もまた、このブックレットを読んで、あれこれ想像を巡らしたり、賛成したり、怒りを覚えたり、場合によっては誤植を見つけたりする「仕草」の中で、いつしか Aprés-Calle （ソフィの後）の迷い路にはまりこまれんことを。

鷲見　洋一
慶應義塾大学アート・センター所長